

# 保育の知

深くかかわることによって

津守 真

深いところがかかわれるようにと願って子どもの傍にいと、通りすがりに見ている時とは違ったものが見えてくる。私はこのことを保育の実際の場でしばしば経験してきた。

秋のある日、庭で、水の出るホースをもって遊んでいる子どもがいた。その頃、私は何人かの子どものことで手一杯で、その子と遊ぶことが少なかった。その日、その子はひとりでホースの水遊びをしていたので、私はその子とつき合える者になりたいと思い、しばらく子どもの傍に立っていた。

深くかかわる気を持たないでいる時には、濡れるとか汚いとか、早くしなさいというように、大人の側の枠から一方的に子どもを見て評価することが多くなる。その子とかかわる可能性をもって傍にいただけで、こまかいところまで気が付き、親しみ深く見られるのは人間関係の不思議である。

その子は、しばらくするとパンツが濡れたらしく、自分で脱ごうとしたがうまく脱げない。土の上で脱ぐと泥がつくし、私は手伝おうと思い、声をかけ抱きかかえて部屋に入った。そこで発見したのだが、この子は水でびしょびしょになって遊んでいるように見えたのに、衣服と身体も濡れていない。ほんの少しパンツが濡れたのがいやで脱ごうとしていたのだった。この子は自分も身体は濡れることなく保っていて、水を操作している。

私は一学期のはじめの頃を思い出した。入園当初にこの子は水たまりの中に腰まで入りたがり、身体が泥に汚れることが多かった。泥との境界がなかった自分自身から、周囲とは一線を画した自分自身の認識へと、自我の輪郭が明瞭になってきたように思えた。

この子はパンツをはくと、もはや庭の水場にはいかないで、ホールに走っていった。ホールの真中に、箱積木で囲って新聞紙のプールが作ってあり、そのへりに室内用ジャンブルジムと滑り台が組んであった。その子は積木のへりを冒険しながら歩き、滑り台から滑った。私が下にいて手をひろげると、私の腕の中に入って笑った。いつも鉄砲玉のように走る姿しか私には見えていなかったのに、この時、子どもは私の顔を見て笑った。

それから私の手につかまって平行棒の上を歩いたり、自分ひとりで腹ばいになってむつかしい場所を渡ったり、たのしそうに、自然体になって身体を動かしていた。ひとりでは危なっかしいところでは手をのばして助けを求め、私との関係を意識している。ときどき私の腕の中に顔を埋めに来る。身体と身体の接触を通して、信頼の感覚が互いに伝わっていることは疑いもなかった。はじめはどのように展開するか分からずに、深くかかわれる

ようにと願って傍にいただけなのに、わずか一時間程の間に心が通い合う関係になれるのは、保育者のだれもがどこかで経験していることではなからうか。

保育の実際においては、具体的なことは毎日違う。子どものひとりひとり、保育場面のひとつひとつが独自である。けれどもその毎日の中に共通のことがある。ここに記したある日の保育の中にも、またその他の多くの日々にも共通のかかわりの前提を次に取り出してみようと思う。

### 1、子どもと深いところがかかわる

浅いところがかかわるときには、大人の側の枠から一方的に子どもを評価しがちである。そのときには子どもの心の深みにある願いや悩みにまで保育者のアンテナが届かない。

保育の中で子どもと大人の両方に通い合う信頼の感覚を保育者が体験するときには、子どもと共有されている心の深い部分でのかかわりがある。それは、生命性とか、宇宙性とか、心の深層とかいろいろのことばで表現しうるだろう。心の深いところがかかわりたいと願っていると、直ちにそれが可能になるのが子どもとのかかわりである。

### 2、保育者は子どもとかわるたびに自分を新しくする

保育者は、子どもとかわるとき、それまでの自分を転回させて、新しい自分となって子どもに向き合う。そうでないと、それまでの自分にひきずられて、異質な子どもとかわ

わかることができない。私共は、この子はこういう子だという偏見や知識を持っている。また、自分はこんな子とはうまくつき合えないというような、自分自身に対する幻想を抱いている。保育の場ではそのいずれもが砕かれることがしばしばである。また、そうでなければ保育の場は力動的に展開しない。子どもとかかわるたびに、大人も自分自身を変えられているのが保育の場である。外から見ればいつもと変わらぬ保育者と見えても、内面は日々新たになっている。そうでなかったら、成長しつづつある子どもが満足するはずがないだろう。

### 3、保育者は、前向きに、かわりを継続し、新しい関係を創造する

このことを自覚していないと、子どものかかわりは停滞し、よどんでしまう。人間は何と弱い者であろうか。いつも重力にさからって、未来に向かって立つ精神的存在であることを自らに言いきかせていなければ、保育者個人だけでなく、保育の場全体が低下してしまう。

### 4、それぞれの子どもがあるがままを認め、そのあるがままとかかわる

大人の期待や価値基準とは違って、それぞれの子どもが自分らしく生きることを認め、更にその子どもとやりとりする。子どものそのままを否定してかわるのと、肯定しかかわるのとは、保育者と子どもとの関係はまるで違ったものになる。子どもが自分らしく振舞って承認されるときには、その心の深いところを保育者に見せるようになる。異質な子どもたちのそのままを尊重し、保育者をも含めて一緒に生活する工夫が、保育者

に求められている。具体的には日々違う工夫である。

### つけたし

ここに記した「ある日」の翌日、私はこの子の両親と話をする機会があった。この家族には、父親の転勤、家族の病気など大変なことが相次いだ。そのぬきさしならない生活の中で、親はこの子を毎日私共の所に連れてきていた。ここにくるとこの子の生活が落ち着くので、子どもにひかれて毎日連れてきて良かったと両親は語ってくれた。

私自身はこの子とつきあう機会は少なかったのだが、担任の保育者との間で、ここまでかわりが育ってきていることが、この日よく分かった。ここに述べたかわりの基本は、他の保育者との間にも共通の実践の知であろうと思う。

(愛育養護学校)

